

平成二十二年六月一日発行（毎月一回一日発行） 通巻八四五号

火星

平成二十二年六月号



七曜抄
(六)

山尾玉藻

体育館煌と灯せる田水村

カリヨンの鐘はぬらさず若葉雨

蓮見舟もどり来いづれしづかなり

影大き鳥ばかり飛び麦の秋

衣更へて杉あかりする豊かな
螢にだんだん馴れてきたる声
舟虫のどつと走りて祭くる
水音をとほしてゐたる夏木賊
若きらに離れてラムネ飲みにけり
水屋の戸開いてをりたる日の盛

太白星

柳生千枝子

陽炎のまん中にゐて眼鏡拭く
母と手をつないで歩く花の冷
桜餅 仏間 無人の冷が棲む
「家なき子」読む囀の只中に
花の冷夕濤音をたて始む
高みより竹の落葉の飛翔距離
スイトピー誰か口笛吹いてをり

杉浦典子

うぐひすの声の弾みし違ひ柵
紐引いて開けるくぐり戸鳥ぐもり

吸呑にミルクティー入る雛の日
墓穴を出でて饑ひだるきかほならず
寝返りに手を添へ燕くるころか
花曇どこにも合はぬ鍵ひとつ
鳥帰る均して広き池の底

浜口高子

啓蟄や裏のざらつく手漉和紙
初燕潮じめりせる始発駅
虫穴を出づ茅葺の軒しづく
雁帰る津波警報出でし夜
初蛙田の面にゆるみなかりけり
眼帯に黄塵は空はがれゆく
臥龍松よりこぼれたる雀の子

火星作品

山尾玉藻選

初つばめ芥が岸を離れけり
明石戸栗末廣

啓蟄の唐招提寺雫せる

水中の混みゐてしづか鳥の恋

遠足に波つぎつぎと手つなぎ来

さくらさくら朝のメールの古びたる

三楹の満開に傘さしかけぬ
宝塚山本耀子

御影石研く音せる初桜

さへづりや土の切れ味よき鋏に

水草生ふ渡しやセーラー服揃ひ

柿渋の傘のにはほへる牡丹園

菩薩絵を吊す踏台春まつり
宝塚蘭定かず子

啓蟄やそれぞれ好きなら樹へ歩み

紅梅へゆく虫柱はらひけり

踏青の浮棧橋に行きあたる
つちかぜと軍行橋を渡りけり
雛流し糺の神の見そなはす
島原は湯屋おほくして鳥の恋
火をつくし鮎子料る日なりけり
年寄に舌のだうらく蕨汁
朝桜獸舎はつかにさざめける
鳥原や髪のだんだん冷えて来し
幼より葉書一枚水ぬるむ
床下に父のどぶろく鳥帰る
蛇穴を出でどろんこの奈良ホテル
卒業の日の鴨沖に出てゐたり
猪のぬた場凸凹霜の花
手にはめて軍手を洗ふ花八ツ手
ドアマンの銀のモールや雛の日
春雨や水ある池となき池と
水の上を走りて残る鴨となる

神戸深澤 鱻

大和郡山城 孝子

八幡坂口夫佐子

選のあとに

山尾 玉藻

初つばめ芥が岸を離れけり 戸栗 末廣

「初つばめ」が空を截つた事実と「芥」が岸を離れた事実とは全くの偶然であるが、二物が一つの景となつた時点で必然的な関りが生まれ、詩が生まれた。掲句から、それまで岸を離れそびれていた「芥」が、何か吹っ切れたように岸を離れた印象をもつ。それは「芥」とは全く対照的な躍如とした動きの「初つばめ」の働きに他ならない。この点で、「初つばめ」の動きと「芥」の動きには必然的な関りがあると言える。季語の斡旋の巧みさはもとより、単なる写生を超えた写生を何気なく示してみせる作者の技量に、思わず膝を打つた。

三楯の満開に傘さしかけぬ 山本 耀子

浅春の候、葉に先だつて花を咲かせる落葉樹の中で、「三楯」の花は大変印象的である。黄色い花が房状に垂れて咲く様子が早春の陽光を懸命に湛えているようで、健気にさえ思える。それが雨中で滴を抱いている様子は、いかにも冷たさうで哀れを誘つたことだろう。思わず「傘」をさしかけた作者のこころの動きが、手にとるように知れる。

紅梅へゆく虫柱はらひけり 蘭定かず子

〈紅梅に寄り白梅を見てあたり 岡本差知子〉や〈紅梅やすさまじき老手鏡に 田川飛旅子〉から感じられるように、気高く清楚な「白梅」に対し、「紅梅」にはどこか人を受け入れる翳りがある。掲句、厭わしそうに「虫柱」を払いながら「紅梅」へ近づいてゆく姿に、人としての淋しさ、佳しさが垣間見え、「紅梅」ならではの一句と言える。

火をつくし鮎子料る日なりけり 深澤 鱈

三月ともなれば明石、須磨辺りの漁港では「鮎子」がどつと水揚げされ、市場はそれを求める主婦たちで大いに賑わう。京阪神地方では「鮎子」はまさしく春告魚であり、主婦たちは早春のひと日を「鮎子」の釘煮作りに費やし、甘辛いの香に春の到来を実感する。とろ火でじっくり時間をかけて煮こむ様子は、まさしく「火をつくし」の表現に尽きる。無論「こころを尽し」に通じる措辞である。

卒業の日の鴨沖へ出てあたり 城 孝子

海か湖にほど近い学校の卒業式の日の一景。日頃は汀近くでのんびりと浮ぶ鴨たちが、今日は沖合へ出ていて姿が見えない。いつも居るべき鴨たちがいない水辺はどこか淋しく、流れてくる卒業歌にも一層哀感が漂うようである。それをしんみりと聞き入っている作者であろう。

(以下略)

恒星圏

同人 I

垣岡暎子

うすらひや下校の声の重なりぬ
啓蟄の古墳にたちし朝の靄
切株にナンバープレート燕来る
海苔刈の舟海苔網をくぐりけり
助手席は夫の定席山笑ふ

岡和絵

加古みちよ

起きぬけののんど乾けり猫の恋
白魚のひとつひとつに翳ありし
ものの芽の影のかさなる火葉蔵
強東風や待合室の小座布団
白鯨のやうな雲うくいぬふぐり

島原に残る大門鳥雲に
鳥雲に女出で来る輪違屋
両拳すつくと春の風に立つ
臥龍松へ日の移りたる春障子
啓蟄の水汲んで来し砂あそび

長田曄子

河崎尚子

傘立の柄の細長し花ミモザ
小児科のドアの日おもてチューリップ
剪定のはしごの先の飛行雲
檜扇も母の手すさび豆雛
きさらぎの淀みに鯉の巨き口

春北風雫こぼしつ貨車止まる
霜焼けのむらさき色の露の薑
耕の土に初蝶来たりけり
足踏みをして春泥を落としけり
龍天に登りお産に間に合はず

獅子座

山尾玉藻推薦

川端俊雄

湖に日のせり上る残り鴨
だしぬけに鳥屋のふためくよなぐもり
海坂に船現るる人丸忌
雛の灯をまばらに合掌造りかな

緒方佳子

雛飾り夫と寝どころ別にせり
雲を見て歩いてをりぬ菜の花忌
桃咲いて大発の水ふくらめる
緩やかに畳みてありし紙風船

涼野海音

啓蟄やドア開いてゐる楽器店
雛段の後ろより母現るる
春雷やパソコンに打つパスワード
全集に恋の句見つけたる虚子忌

田中文治

校長の留守の机の黄水仙
もう去ぬと言うてまた摘む蓬草
花こぶし雲の流れのほぐれけり
干蝶の下の水舐む猫の舌

奥田順子

太陽の塔に貌三つ地虫出づ
水尾の上を水尾の過ぎゆく遅春かな
本尊は暗がりになす涅槃絵図
秒針の音なき音や春の昼

井上淳子

取り仕切る兄が初音を聞き留めし
満中陰初筍をまづ供ふ
落椿重なり合うて色たがふ
クレソンを摘まず湧水掬ひけり

村上留美子

陽炎や紺緋入る輪違屋
木の芽冷供花のセロファン舞ひ上がり
ゆでこぼす湯のうすみどり春の風邪
朝靄の切れま切れまの木の芽山